

おぼけに遭った、おぼけを見た、おぼけにあれこれされた、なんてことは、証明するのが不可能に近い。

おぼけに対するときには、だいたいが一人だし、それが仮に十人だったにしても、その十人が他の十人に信じてもらうのが難しいものです。

ですから、ここで次から次へと、おぼけを登場させても、どうせ作り物か空想か、あるいは、頭がおかしいのだろうとおもわれるだけなのです。

ということは、書けば書くほど、ぼくの頭がおかしいことを、世間にしらしめるだけのことで、なんにも得になんかなりません。

それでも書かずにいられないのは、おぼけ好きの業（ごう）とか、性（さが）とか、そんなふうにはっきりありません。

どうせそうなら、よし世界記録を目指してやろうかとかんがえていますが、いまのところ世界記録がどのくらいのものかわからず、暗中模索（あんちゅうもさく）のなかで書きつづけています。

おそらくとっくに世界記録に達してしまっているのですが、それならそれを金輪際（こんりんざい）抜かれないよう、書きつづけるのみです。

この執念はきっと、なんらかのおぼけの影響、感化によるものなのでしょうが、そのなんらかが具体的になんなのかはかいもくわからないのです。

+ 6 1 【はれい】

「【はれい】というおぼけがいます」

と懐翁がいました。

ぼくは齒をむきだしにして、

「【はれい】かい」

といました。

「その【はれい】もいます。【はれい】には、七種類もいます。すなわち、

齒霊

刃霊

葉霊

羽霊

波霊

禿霊

腫霊

です。みんな、そこに、人の顔がいくつも現れるおぼけです。今回は齒霊ではなく、刃霊。完ちゃんの家で、正宗（まさむね）と伝えられる刀があります。完ちゃんのご先祖は、立派な武将でしたが、悲惨な最期（さいご）を遂げました。その武将と、武将を慕って殉死（じゅんし）した家来の顔が、正宗に現れるのです」

「かいじいは、どうしてしっとる」

「霊気（れいき）というものですかね。それがこの祠までやってくるのです」

「その【はれい】をやっつけるには、どうすればいいのかな」

「やっつけることはできません。霊を鎮めるだけです」

「だば、しずめるためには、どうすればいいのかな」

「そうですねえ。完ちゃんの家から正宗を持ち出してくれば、あとはわたしがなんとかします」

「わかった。わしがもってこよう」

「だまって持ち出すんですよ。誰にも気づかれてはなりません」

「まかせなさい」

というわけで、ぼくは正宗を持ち出しました。

持ち出すのは簡単でした。

「よくやりましたね、金ちゃん。これで大丈夫です」

懐爺は正宗を大事そうに抱えて、祠のなかへ消えていきました。

さてそれから、正宗の話は懐爺の口から一度も出ませんでした。

ぼくは良かった良かったとおもいましたが、いまかんがえてみると、懐爺は正宗を売り飛ばして、それで食っていたのかもしれない。

どっちにしても、結果的に、ぼくは泥棒か泥棒の手先になったわけですが、まあ懐爺の生活のためならしかたがない。

完ちゃんもそうおもってくれるでしょう。